世界遺産都市を歩く

第8回

海峡の植民都市の行方

マラッカとジョージタウン

文・写真
西村幸夫
東大教授

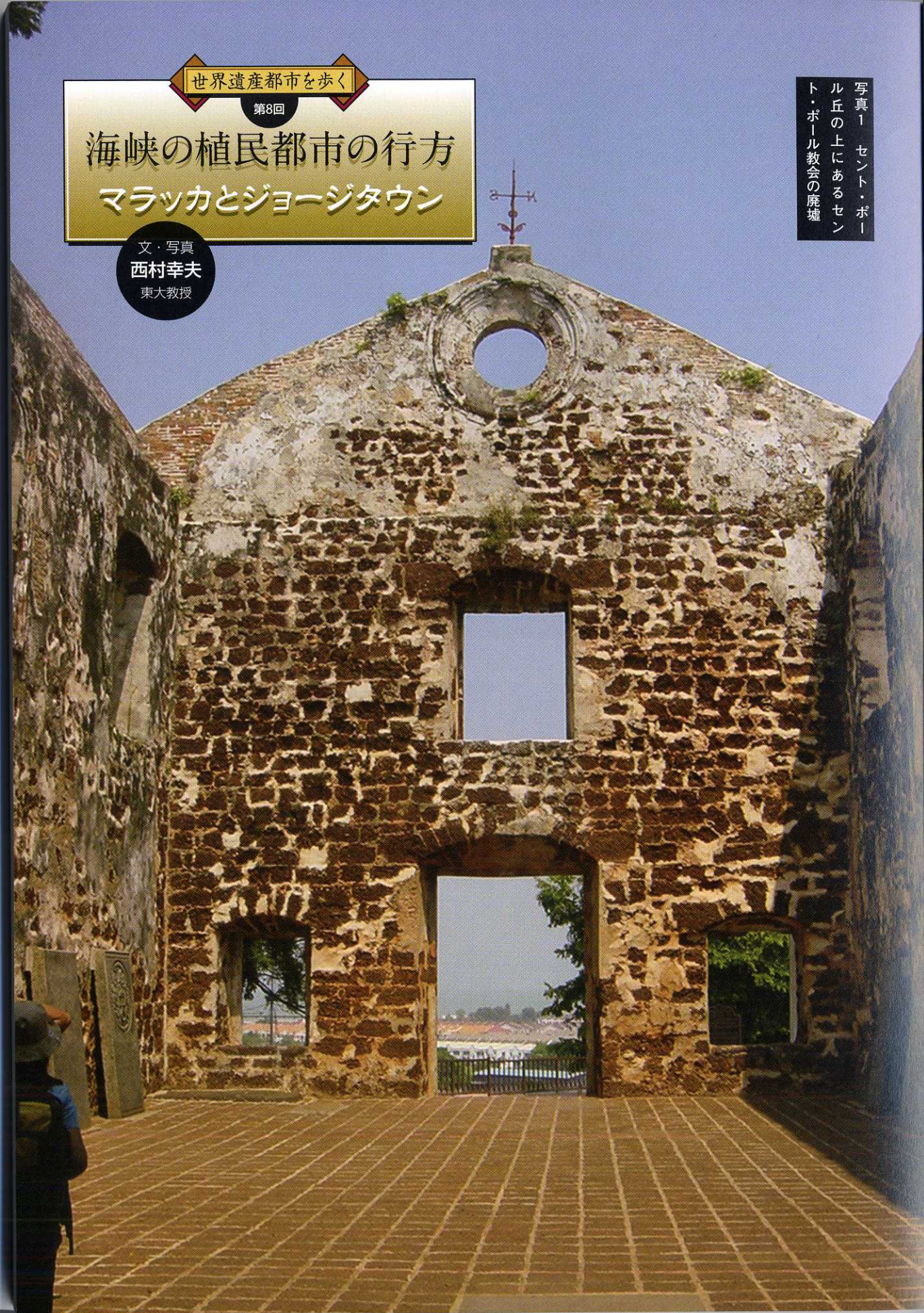

写真1　セント・ポール丘の上にあるセント・ポール教会の廃墟

写真2　マラッカ、セント・ポール教会の廃墟の開口部を通して、マラッカ海峡を望む

写真3　セント・ポール丘の登り口

＊＊＊＊

マラッカとペナンのジョージタウンは合同で2008年7月にマレーシア初の世界文化遺産として登録された。登録のタイトルは「マラッカとジョージタウン、マラッカ海峡の古都群」。なお、マラッカは英語ではMalaccaだが、登録名称はマレー語のMelakaである（したがって本来はマラッカと発音・表記するのは不適切かもしれないが、国際的に知られた地名となっているので、通例に従うことにする）。

両都市は知られるようにいずれも植民都市としてマラッカ海峡の沿岸地経済の拠点として機能した点では共通性があるが、その歴史はおおきく異なっている。

マラッカは14世紀末に成立したマレー人による王国であり、その後ポルトガル（1511～1641）、オランダ（1641～1795）、イギリス（1795～1943～1945）、日本（1943～1945）の支配を経て現在に至っている。これに対してペナン島は1786年、イギリス東インド会社によって占拠され、ジョージタウンはその中心地として成立した。この時、この島はプリンス・オブ・ウェールズ島と命名されたのである。つまりジョージタウンはイギリス人が自分たちの貿易の都合で作り上げた純粋な植民都市なのである。

歴史だけでなく地形の面でも両者は相違している。マラッカが河口近くの小高い丘陵地を中心に形作られたのに対して、ジョージタウンは島の北東の平坦な端部に砦を築くことによって成立した。

ただし、両都市にはもちろん共通点もある。西アジア・インドと東南アジア・中国とを結ぶ貿易の拠点であり、季節ごとに風向きが変わるモンスーンを利用した舟運のためには欠かせない中継点であったこと、数多くの中国人が流入し、西洋人、マレー人、中国人、そしてのちにはインド人も含む多様な人種と宗教からなる豊かな都市文化があるいは並立し、あるいは融合して形成されていったことなどである。その典型例として多彩な様式を示すショップハウスがある。

マラッカとジョージタウンのジョイントノミネーションはトップダウンの政治的決断だったといわれているが、マラッカ海峡という固有の地理的条件に恵まれた海域に発達した植民都市群としてみると、主として前・中期を代表するマラッカと後期を代表するジョージタウンを並行して選び出すことは不自然ではない。

ただし、代表選手ということであれば実際はシンガポールがその後に続くべきなのであるが、近代化が著しいシンガポールには残念ながら世界遺産とすべきところが

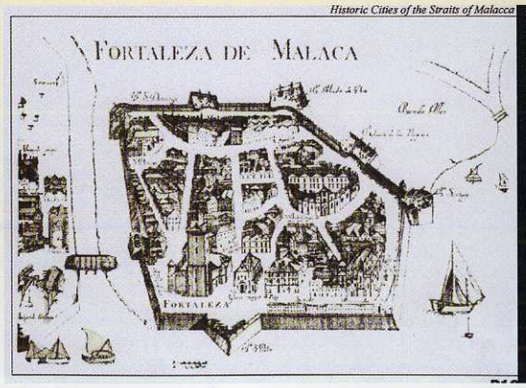

図1　マラッカの砦、1512年のポルトガル人による要塞の図。西にマラッカ川が描かれ、川を渡って西側にはすでに集落が見える。

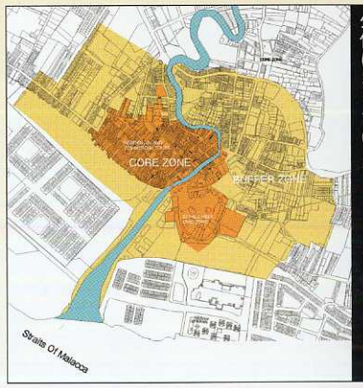

図2　世界遺産のコアとバッファーゾーン、マラッカ。マラッカ川の河口付近に広がる埋め立て地はバッファーゾーンの外側になっている。

写真4　マラッカのへそ、Town Square、時計塔の右手奥にオランダ総督らの住居ともなったスタダイス、左手奥にキリスト教会が見える。いずれもマラッカ・レッドというべき落ち着いたエンジ色。

写真5　マラッカ、Town Squareへの北からのアプローチ、ラクサマナ通り。近年、マラッカ・レッドへのこだわりがさらに増しているように見える。

残っていないことから2都市での申請となったということになる。

もっとも、シンガポールが1819年のラッフルズ上陸以降、急速に発展したからこそ、ジョージタウンへの投資が手控えられ、貿易も下火となり、結果として世界遺産ともなる歴史都市が残されたのである。歴史とは皮肉なものだ。

ここでは、西洋列強がいかに理不尽に自分たちの都合だけでアジアの諸都市を翻弄してきたかは問わない。その爪痕を共有する遺産(shared heritage)という美しい呼称で糊塗することもしない。ただまずはまちを歩き回って都市の重層性からまちの歴史を実感したいと思う。

＊＊＊＊

マラッカは、今では埋め立てが進み、かつての状況が分かりにくくなっているが、マラッカ川のもとの河口のところに、現在セント・ポール丘と呼ばれている小高い丘を中心に形成された集落である(**写真3**)。かつてはマラッカ王国の中枢部であったこの丘のうえには、現在はセント・ポール教会の廃墟がたっている(**写真1，2**)。

この丘からマラッカ川へ下りきったところに中国人街である対岸へ渡る古くは唯一の橋がかかっており、そのたもとが現在の都市のへそにあたる。今はタウン・スクエアもしくは地元ではダッチ・スクエアと呼ばれている。周りにたっている建物がすべて漆器の赤い色のようなというべきか、日本のバスポートの色に似ているというのは不謹慎かもしれないが、そうしたやや黒みがかった彩度の低い赤い色で塗られているのが際だった特徴である。このマラッカ・レッドがこのまちの基調色なのである。

赤の広場に面してスタダイスと呼ばれるかつての総督府やキリスト教会などのオランダ建築が並び、赤い時計塔とともにマラッカのシンボル的な風景となっている(**写真4**)。

丘の南側ふもとにはマラッカ王宮の建物(復元)からポルトガル時代の砦跡、イギリス時代の洋館群、さらには独立後の記念モニュメント(いずれも実物)まで各時代の建物がそろっている。じつはこの南側にはムルデカ広場やパラワン広場と呼ばれていた広々としたグリーンスペースが広がっていたのだが、世界遺産登録前に巨大ショッピングセンターなどが建設され、バッファーゾーンの雰囲気を台無しにしてしまった。赤の広場に面して巨大なタワーまであやうく建設されるところだったが、基礎杭を打ち込んだ段階でストップがかかり、なんとか数百メートル南東側にずらして建てられた。

写真6　マラッカ川沿いに整備が進むプロムナード。遊歩道のみならず、川に面した建物の修景も急ピッチで進められている。

写真7　マラッカ川をわたって西側の住商混合したショップハウス群。

これほどに開発の圧力は高いのだ。

対照的にマラッカ川沿いは2003年から遊歩道整備の大プロジェクトが進められ、現在では歩いて楽しいプロムナードが形成されつつある(**写真6**)。

マラッカ川を渡るとチャイナタウンである。かつてはオランダ人によって17世紀に建てられた簡素なショップハウスが並ぶ地域だった(その名残に現在もヘレン通りやジョンカー通りの通称名が使われている。オランダ以前のポルトガル人たちはおもに砦のなかだけに住んでいたようである)が、その後ババ・ニョニャと呼ばれる裕福な華僑の手に渡り、前面の1階部分が通行可能なアーケードになった豪華な建物へと変身していった。ショップハウスは、ジョージタウンでもそうだが、1930年代から50年代にかけてのアールデコやアーリーモダンまで、連綿と建て続けられ、それが今日の600を超すショップハウスからなる街路風景をつくりだしている(**写真7**)。

写真8　ジョージタウン都心部の俯瞰風景

＊＊＊＊＊

一方でジョージタウンはペナン島の北東端にわずかに岬のようにつきだした先に要塞（コーンウォリス砦）を構え、その南側に居住地を配した港市として出発した。イギリスの占領からわずか12年後の地図（１７９８年、**図３**）を見ると、縦３路線、横６路線のグリッドが描かれており、ここに北から官公庁、中国人街、インド人街、さらに南にマレー人街がつくられた。これらの通りは現在も規則的なグリッド街区として残されており、ショップハウスが建ち並ぶ世界遺産のコアゾーンを形成している。

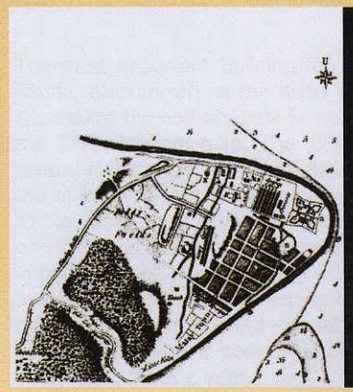

図３　初期のジョージタウンの地図（１７９８）。コーンウォリス要塞とその南に広がる華人街にめぼしい都市施設はない。６本並行して走る東西路の北から４本目が中心軸となるチャイナ通り、３本並行してつくられた南北路の中央が第二の軸であるキング通り。これらの街路パターンはいまもそのまま残っている。地区を見下ろす

このちまちは、西・南（そして一部は海を埋め立てて東）へ向けて拡大していくが、道路パターンは規則性が薄れていく。このあたりがちょうどバッファーゾーンに指定されている。なかでも興味深いのは海上へ突き出た桟橋状の海上住居群である（**写真12**）。これらの住居は魚の骨のように背骨にあたる桟橋部分とそこから枝分かれする小骨部分とから成り、ここに２４９世帯にも及ぶ住宅が立地しているのである。それぞれの桟橋は同姓の一部族で構成されている。もともと公有水面の不法占拠であったが、１９６９年に暫定的な占有許可がおりて、現在は合法的な住宅群となっている。

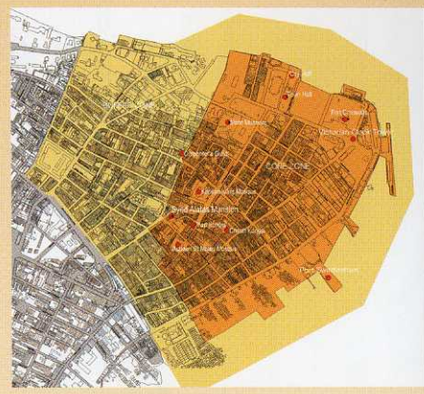

図４　世界遺産のコアとバッファーゾーン、ペナン島ジョージタウン。図３の市街地を一回り大きくしたのがコア・ゾーン、１７９８年の絵図の範囲がほぼバッファーゾーンに重なっている。

ペナン島は北部に有名なビーチを有する大観光地であり、ジョージタウンも開発の圧力にさらされている。１９８６年に市街地の都心からわずかにはずれたところに65階建ての超高層オフィスビルを建て（コムターと呼ばれる、**写真11**）、旧都心部の開発の圧力を緩和しようとしたが、それだけではまかないきれず、近年、ホテルやマンションの建設が動き出しており、それが世界遺産委員会の耳に入るなど、問題視されつつある。

＊＊＊＊＊

世界文化遺産の審査にあたって、イコモスの評価は、両都市が5世紀以上にわたって東西交易の拠点であり、両都市がそれぞれ異なった時代の特色をよく示していること、アジアのみならず西欧も含めて、様々な面で文化多様性を体現していること、ショップハウスやタウンハウスの類型が非常に豊富であることから世界遺産の価値はあるものの、保存管理のあり方に改善の余地があるとして、その部分の追加情報を求める情報照会と評価したが、２００８年の世界遺産委員会はこの提案を覆し、現時点で十分に登録の価値ありとして可決した。世界遺産登録がむしろ開発を呼び込み、両都市の顕著で普遍的な価値が浸食されないことを祈るばかりである。

写真９　ジョージタウン、東側の海岸沿いのコロニアル建築が立ち並ぶ風景

写真10　ジョージタウン都心部のショップハウス群

写真11　ジョージタウン、遠くに見える超高層ビル、コムターは１９８６年に建設された65階建てのオフィスと商業の複合ビル。建設当時はアジア最高の高さを誇ったという。現在は保存と開発の奇妙なアンバランスを象徴する建物となっている。

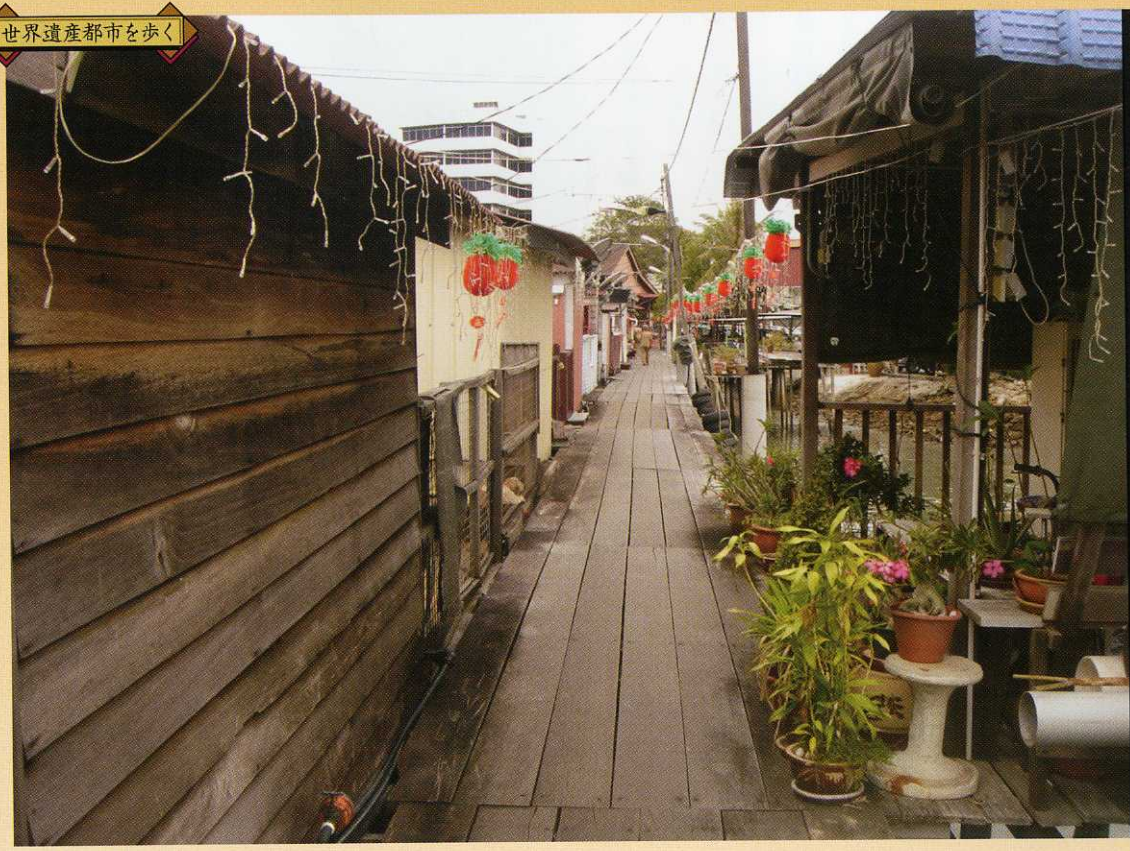

写真12　ジョージタウン、東岸の桟橋に張り付く海上住居群。